## プログラム・ノート

**山本明尚**

### プロコフィエフ：弦楽四重奏曲第2番 ヘ長調 作品92

セルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)の弦楽四重奏曲第2番は第二次世界大戦中、1941年の作品。当時コーカサスの麓に位置するカバルダ・バルカル共和国に疎開していた彼は、同地の民族舞踊を取材し、ユニークな弦楽四重奏曲を作り上げた。**第1楽章**は、カバルダの男性の舞踊の伸びやかな旋律を主軸とした楽章。緩徐楽章の**第2楽章**は、打楽器的なアーティキュレーションが特徴的。**第3楽章**は闊達で力強く、楽器法による独特の音色の組み合わせは民族楽器の模倣を試みたもの。

### ヴァインベルク：弦楽四重奏曲第6番 ホ短調 作品35

ミチェスワフ・ヴァインベルク(1919～96)は、ポーランド生まれの作曲家。1939年にワルシャワ音楽院を卒業した直後、ナチスの侵略を逃れるためにソ連へと出国し、そこで活躍した。多様なジャンルで数多の作品を創作した彼だが、17曲を数える弦楽四重奏曲は、13歳年長のショスタコーヴィチと競い合うように創作を行ったことで知られている。

弦楽四重奏曲第6番は1946年の作品。**第1楽章**の音楽は抑制が効きつつも、ぎくしゃくとした音色の変化や和声の構成は、どこかおかしみを感じさせる。第2楽章から第4楽章は途切れずに演奏される。**第2楽章**は情熱的なスケルツォ楽章。**第3楽章**では、急速なパッセージにヴァイオリンのカデンツァが差し挟まれる。**第4楽章**は自由なフーガ。**第5楽章**はやや明るく軽妙な主部と、層をなす分散和音を主軸とした神秘的な中間部による。最終**第6楽章**は付点による荘重な楽想に始まり、緊張感のある丁々発止の楽想がそれに続く。

### ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲 ト短調 作品57

ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)がベートーヴェン四重奏団からの依頼でピアノ五重奏曲を作曲したのは1940年のこと。彼らと作曲家自身のピアノによって初演されると評判を呼び、ソ連各地で演奏され、翌1941年に設立されたばかりのスターリン賞第一席を受賞するに至った。

**第1楽章**は前奏曲。堂々たる序奏と、軽やかな主部が対比される。**第2楽章**のフーガは対位法による名曲を多く残したショスタコーヴィチの面目躍如。**第3楽章**はスケルツォで、躍動的で朗らかながらもどこか引っかかりのある音楽。**第4楽章**は間奏曲。チェロやピアノのリズムに乗せて、静かで美しい旋律が奏でられる。続けて演奏される**第5楽章**のフィナーレは素朴だが彫琢された音楽で、爽やかな聴後感を生む。

(やまもと あきひさ・音楽学)